

戦前期における在名古屋タタール人の 交流関係に関する一考察

吉 田 達 矢

はじめに

戦前期の在日本タタール人⁽¹⁾に関する研究動向としては、これまで回教工作（対イスラーム政策）との関係や各都市に存在していたコミュニティ間の関係などが主に扱われてきた⁽²⁾。一方、在神戸ムスリム・コミュニティについては研究が進展しているように⁽³⁾、今後は各都市に存在していたコミュニティそれぞれの特徴を明らかにしていくことが必要であろう。

戦前期の在名古屋タタール人コミュニティの場合、神戸や東京のタタール人との関連や、名古屋モスクに関して言及されることはあっても、コミュニティの視点からその特徴について考察されることはほとんどなかった。このため、筆者は別稿にて、戦前期の名古屋市を生活基盤としていたタタール人の諸相、すなわち、彼らの人口数の変遷と就業状況、彼らが結成した2つの団体（名古屋回教徒団とイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会名古屋支部）の概要およびほかの都市に存在していたタタール人コミュニティとの関係などについて考察した⁽⁴⁾。しかし、彼らの社会生活については史料の制約もあり、いまだ不明な点が多い。そこで本稿では、既発表の論考と重複する部分もあるが、在名古屋タタール人の交流関係について考察する。戦前期の在名古屋タタール人コミュニティに関する先行研究として、重親知左子氏が松坂屋との関係について考察しているが⁽⁵⁾、さらに多様な観点から彼らの交流関係について検討し、戦前期の日本におけるタタール人の動向の

なかでの在名古屋タタール人コミュニティの位置づけを明らかにするための手がかりとしたい。

本稿の構成として、前半ではムスリム（イスラーム教徒）との関係に着目する。その理由は、戦前期の在名古屋タタール人のほぼ全員がムスリムであり、彼らにとってイスラームが多様な人物や団体との関係を築くうえで重要な要素であったと思われるからである。また後半では、彼らの社会生活の基盤であった名古屋市の人々や、東京との関係について考察する。

1. ムスリムとの関係

(1) タタール人

在名古屋タタール人コミュニティと名古屋市以外に存在していたタタール人コミュニティとの関係については既発表の論考にて考察した。以下では、その結果を要約しつつ、若干の補足を加えて、彼らの交流関係についてまとめたい。

大正12～14（1923～25）年ころに名古屋市に定着するようになったタタール人⁽⁶⁾は、「東京回教徒團」（大正14（1925）年1月設立）を本部とする、いわば「支部」として名古屋回教徒団を昭和6（1931）年3月に設立した。それはつまり、当時の在名古屋タタール人コミュニティは東京在住のタタール人との結びつきが強く、さらにいえば、東京回教徒団の中心人物ムハンマド・ガブドゥハイ・クルバンガリー（1889～1972）⁽⁷⁾（以下、クルバンガリー）の影響下にあったといえる。

しかし、タタール民族運動家として知られていたアヤズ・イスハキー⁽⁸⁾（以下、イスハキー）

が昭和9（1934）年1月に来名し、同年3月までにイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会名古屋支部（以下、名古屋支部）が設立された前後から、昭和13（1938）年5月12日の東京モスク献堂式に在名古屋タタール人9人が参加するまで、東京回教徒団との関係は断絶したようである。実際、東京回教徒団が開催した「コーラン出版記念祝賀会」（昭和9（1934）年6月7日）、「東京回教徒団創立十週年記念祭」（昭和10（1935）年1月27日）、「禮拜堂（＝東京モスク）起工式」（昭和12（1937）年10月19日）などにおいて、在名古屋タタール人が出席した形跡はみられない。ただし、東京在住のタタール人との関係が全て途絶えたわけではなかった。たとえば、昭和12（1937）年1月22日に行われた名古屋モスク完成祝賀会には、東京の「イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会」からの参加者がみられた⁽⁹⁾。つまり、断絶したのはあくまで東京回教徒団、あるいは東京のクルバンガリー支持派の者たちとの関係であったと思われる。

一方、東京回教徒団との関係が疎遠になると反比例して、在神戸タタール人コミュニティとの繋がりは強くなっていった。たとえば、東京においてクルバンガリー支持派とイスハキー支持派の対立が激化した時には、在名古屋タタール人の殆どは在神戸タタール人とともにイスハキー側を支持した⁽¹⁰⁾。その後も、昭和9（1934）年5月9～12日にかけて神戸市において開催された「日本イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會聯合會」の設立大会や昭和10（1935）年10月11日の神戸モスク開院祝賀会には在名古屋タタール人からも参加者がみられ⁽¹¹⁾、昭和11（1936）年には名古屋モスク建設資金として在神戸タタール人コミュニティの有力者のひとりであったアグルジ Agurji より1,000円を借り入れている⁽¹²⁾。同年にはさらに、「タタール系舊露國人就學兒童五、六年生用修身教科書」が神戸より送付されている⁽¹³⁾。このような密接な関係の背景には、昭和6（1931）

年2月に神戸トルコ・タタール協會会長となったシャムグニ Shamguni（1873/74－1939）と在名古屋タタール人コミュニティの中心人物のひとりであったティメルバイ・ハミドゥラー Timerbey Hamidullah⁽¹⁴⁾との関係が見出せる。シャムグニは、名古屋モスクの落成式（昭和12（1937）年1月22日）において配布された冊子（以下、『冊子』）に短文を寄稿⁽¹⁵⁾していることに加えて、昭和14（1939）年には彼の著作の日本語訳（『アルラーの神と預言者達』）がハミドゥラーによって名古屋で出版されている⁽¹⁶⁾。

このほか、満洲在住のタタール人との関係については、昭和10（1935）年2月4～14日に奉天で開催された「イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會極東大會」、昭和16（1941）年8月28日～9月1日に同じく奉天で開催された「極東イデルウラルトルコタタール民族第二回大会」にも、在名古屋タタール人コミュニティは代表を派遣しており、在奉天イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會本部との連絡は密であったと思われる。実際、名古屋モスク完成祝賀会には、奉天の極東イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會本部副会長ギザトウリンが出席している⁽¹⁷⁾。このほか、名古屋モスクの落成式にはトルコ・タタール人100名余が会合した⁽¹⁸⁾とされるが、詳細は不明である。

（2）インド系ムスリム

『冊子』では、「…遠くは印度・滿洲の回教徒の方々から心から御後援を受けこれに力を得ていよいよ（名古屋モスク）建設の計畫を具体化したのでありますが…」と記されている⁽¹⁹⁾。つまり、インド系ムスリムも名古屋モスクの建設にかかわっていたことがうかがえる。しかし、戦前期の名古屋市にインド（印度）人が居住していた形跡は殆どない⁽²⁰⁾。このため、在名古屋タタール人と関係をもったインド系ムスリムというのは、名古屋市以外の者であったと思われる。具体的には、次の2人が考えられる。

まず1人目は、昭和11（1936）年6月に来日

した「印度人モハメット僧正エム・エー・アリム・ジデイクイ」Muhammad Abdul Aleem Siddiqui (1892～1954)⁽²¹⁾である。彼は日本各地の観光とイスラームの布教のために来日したとされており、同年9月4日に行われた名古屋モスクの定礎式に参加している⁽²²⁾。彼は世界各地をまわり、イスラームの普及に努めた人物であるが、名古屋モスクの定礎式に参加した経緯は不明である。

2人目は、『冊子』に「Islam a Practical Religion」という短文を寄稿したバルラス N. H. Berlas であろう。彼は、昭和7(1932)年10月に東京外国語学校(東京外国語大学の前身)のウルドゥー語教師として着任した。昭和13(1938)年5月12日の東京モスク献堂式には「印度回教徒代表」として出席し⁽²³⁾、同年に創立された東京イスラム教団とイスラム教団連合会双方にもかかわっているが、日本政府や軍部のイスラーム政策からは距離をとっていた人物とされる⁽²⁴⁾。ただし、彼は神戸モスクの落成祝賀会時に配布された冊子にも「BROTHERHOOD IN ISLAM」という文章を寄稿しており⁽²⁵⁾、日本各地へのイスラームの普及には熱心だったようである。なお、名古屋モスクの落成式や完成祝賀会に彼が出席したかは不明である。

(3) 日本人ムスリム

在名古屋タタール人コミュニティと最も深い関係を持った日本人ムスリムは、有賀文八郎(有賀阿馬士, 1866～1946)⁽²⁶⁾であろう。彼は『冊子』に「イスラム教とは何か」という短文を載せており⁽²⁷⁾、名古屋モスク完成祝賀会にも出席している⁽²⁸⁾。また『日本イスラーム史』を記した小村不二男氏は、有賀の案内で昭和15(1940)年浅春の候(3月頃?)に名古屋モスクを訪れたと述懐している⁽²⁹⁾。昭和18(1943)年ころには、有賀は在名古屋タタール人の神戸への疎開に尽力したようである⁽³⁰⁾。以上のように有賀と在名古屋タタール人との交流は確認できるものの、有賀がいつ頃から、どのような経緯で彼ら

と関係を持つようになったのかは不明である。ただし、有賀は「東京イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會」(昭和9(1934)年2月設立)の昭和11・12(1936～37)年時点での顧問として名を連ねており⁽³¹⁾、在神戸ムスリムとも密接な関係を持っていた⁽³²⁾ことから、東京や神戸のタタール人を通じて在名古屋タタール人と交流するようになったと思われる。

このほか、昭和14(1939)年1月に名古屋で出版された、前述の『アルラーの神と預言者達』に、T. Suzuki という人物の写真が掲載されている⁽³³⁾。この人物は、数度のメッカ巡礼を果たし、日本軍のインドネシアにおけるイスラーム政策にかかわった鈴木剛(1904～1945)⁽³⁴⁾と推測されるが、詳細については今後の課題としたい⁽³⁵⁾。

(4) 小結

考察の結果、イスラームを紐帯とした在名古屋タタール人の交流範囲としては、神戸や東京、満洲在住のタタール人との関係だけでなく、インド系ムスリムや日本人ムスリムとの関係も見出すことができた。ただし、その関係性には濃淡があった。たとえば、インド系ムスリムとの関係はおそらく一過性のものであり、名古屋市に居住していなかった有賀との交流も頻繁ではなかったと推測される。在名古屋タタール人の交流の中心はやはりタタール人、とくに在神戸タタール人コミュニティであったと思われる。

2. 日本人との関係

(1) 名古屋市の人々

在名古屋タタール人は、少なくとも昭和7(1932)年2月までは市内各所に散在して居住していたが、遅くとも昭和11(1936)年9月までには彼らの多くは当時の西区天神山町に居住するようになった⁽³⁶⁾。西区天神山町にコミュニティの中心があった時のタタール人の様子や市井の人々との関係については、昭和11(1936)

年9月頃の様子として『新愛知』に以下のような記事がみられる。

土耳古タタール族は…(中略)…日本にも十七、八年前から六百余人が来て、ラシャや既製洋服の行商等をしてをる、名古屋にも十世帯五十二人が天神山町付近に住み、名古屋を中心に近縣都市へ洋服、剃刀、ナイフ等の行商をして祖国獨立の日を一日千秋の思ひで待つてをるのである、彼らはイスラム教(マホメット教)の篤い信者である、名古屋在住の僅か十世帯の人々で、今度東区今池町に工費四千円を投じて教会(=名古屋モスク)を建てることになった…(中略)…性質は比較的勤勉で酒は禁ぜられてをる、煙草も少数の者が喫ふのみ、だから生活は割合に豊かである、今までかつて警察のご厄介になった者がないと自慢してをる…(中略)…お茶は亜熱帯の乾燥地育ちだけにガブガブ飲む、名古屋での彼等のリーダーたるハミドリンさんの如きは、一回に紅茶十杯は平氣で飲む、訪れた記者にも紅茶を出して呉れたので一杯飲んだら二杯目を、二杯目飲んだら…(中略)…三杯目……、これには些か面喰つたが己れの欲するところを正直に相手に施す、その好人物らしいところが嬉しかつた、讀書はあまり好きではないらしい、然し日本の新聞が讀め邦字の手紙位は書けるようであればいけないとあってハミドリンさんのお隣のキリケーフさんの宅を今池町の教会竣工までの學校にあて、彼らの學齡兒童十二人を集めバイム・ハメリさん、本紙天神山販売店主吉田源一さんの二人が先生となつて熱心に教えている、同町二丁目西部の町総代長谷川斧さんが顧問となつて彼等の一切を世話している「町内自慢といふには當らないが町内の特異性、變り種として紹介する」と出題者はいつてゐる⁽³⁷⁾

この記事内容からは、タタール人は周辺住民との日常的な交流があり、積極的に日本(あるいは名古屋)の社会に順応しようとしていたことがうかがえる。そして、近隣の住民たちも彼らに対して悪いイメージはなかったようである。実際、上記の記事は「町内自慢くらべ」という読者からの投稿に基づいたものであった。

昭和12(1937)年1月に当時の東区今池町3丁目135番地に名古屋モスクが完成した後は、在名古屋タタール人の多くがその周辺で居住するようになったと思われる。そこでも彼らと近隣の人々との日常的な関係があったことは、昭和57(1982)時点で名古屋モスク跡地に住んでいた渡辺長十氏の談話からもうかがえる⁽³⁸⁾。このほか、鴨澤巖氏が論考のなかで挙げている、タタール語新聞『ミッリーバイラク』⁽³⁹⁾への広告掲載商店名のなかに、久世圓作商店(名古屋東区研屋町三)、林羅紗店(名古屋市東区呉服町四丁目)、村瀬金太郎商店(名古屋市東区呉服町四丁目)、という3つの名古屋所在の商店の名があり、これらはいずれもタタール人商人を顧客としていた⁽⁴⁰⁾。また、前述の『冊子』と『アルラーの神と豫言者達』はともに「合資会社高橋成弘社」(名古屋市中区南呉服町二丁目)で印刷されている。このように在名古屋タタール人は、遅くとも名古屋モスクが完成した昭和12(1937)年1月前後から、名古屋市の東区や中区、とくに呉服町周辺の人々との交流があったことがうかがえる。つまり、重親氏の論考を補足すると、松坂屋との関係を示す史料は現時点では見いだせないものの、その近隣区域との交流はあったといえる。このほか、名古屋モスクの建設には名古屋市在住の者が援助したようであるが⁽⁴¹⁾、詳細は不明である。

(2) 名古屋モスク記念式典参列者

昭和12(1937)年1月23日に開催された名古屋モスクの落成式と完成祝賀会の日本人参列者として、『名古屋新聞』・『新愛知』・『大阪朝日新聞』⁽⁴²⁾に共通して記されている人物は、青木

鎌太郎、渡邊龍聖、幸田銈太郎の3名である。青木鎌太郎（1874～1952）は当時の名古屋商工会議所会頭⁽⁴³⁾、渡邊龍聖（1862？～1945）は名古屋大学経済学部的前身である名古屋高等商業学校の前校長（名誉教授）⁽⁴⁴⁾、幸田銈太郎は在郷海軍大佐で海軍協会副支部長であった⁽⁴⁵⁾。青木が参列した理由は後述するが、渡邊と在名古屋タタール人との具体的な関係は不明である。幸田は、明治22（1890）年9月16日に和歌山県大島（現在の串本町）沖合で座礁し沈没した「エルトゥール号遭難事件」の生存者63名をオスマン帝国に送り届けるために派遣された比叡の元乗組員（当時は少尉候補生）であり⁽⁴⁶⁾、そのような「トルコ」との縁から祝賀会に参列したと思われる。

このほか、『名古屋新聞』では「林義郎」という人物や「市の外事，社寺課関係の来賓多数」も参列したと記されている。当時の人名録には、毛布商を営んでいた林義郎という名がみられる⁽⁴⁷⁾。在名古屋タタール人の就業者の多くは洋服（特に羅紗）か金物の行商人，あるいはそれらに携わる業種に就いていた⁽⁴⁸⁾と推察されるので，林義郎の参列は彼とタタール人との商売上の付き合いがあったことをうかがわせる。ただし，林義郎と上記の「林羅紗店」との関係は不明である。また，『新愛知』では「肥田（名古屋市）東区長」，『大阪朝日新聞』では「松橋市社会部長」や「白濱憲兵分隊長」という名も挙がっている。白濱憲兵分隊長の特定はできなかったが，当時の名古屋市に駐屯していた憲兵隊からの参加であろう。

以上をまとめると，確認できたかぎりの日本人参列者は，名古屋市あるいは愛知県在住の者たちであり，官僚や軍部の者など東京から参列した者はいなかったようである。このような状況は，昭和10（1935）年10月11日に催された神戸モスク落成祝賀会の場合と一致する⁽⁴⁹⁾。

（3）名古屋市の実業家

昭和恐慌から回復しつつあった昭和8（1933）

年2月，名古屋市斡旋のもと，輸出増進を目的として名古屋新販路輸出協会が組織された。それは，中南米，バルカン，アフリカ⁽⁵⁰⁾などへの新販路の開拓をめざしたものであった。名古屋市と名古屋市の実業家は，これ以降も一体となって輸出振興を掲げ，販路の拡大をめざした⁽⁵¹⁾。このような気運のなかで，名古屋市の実業家たちはイスラームや中東（当時の用語では「近東」）地域にも関心を持つようになったと考えられる。

たとえば，昭和9（1934）年1月16～23日にかけてイスハキーが名古屋市に滞在した折，22日にイスハキーは在名古屋タタール人の有力者たちとともに，名古屋商工会議所副会頭であった高松定一⁽⁵²⁾の招待を受け，60人の日本人商人と会見している⁽⁵³⁾。昭和10（1935）年には名古屋市が「近東埃及地方」に海外市場調査員3名を派遣している⁽⁵⁴⁾。昭和12（1937）11月28日には「シリヤ，パレンスタイン，バルカン，埃及方面に就ての講演映画会」も開催されている⁽⁵⁵⁾。そして，前述のように昭和12（1937）年1月22日の名古屋モスク完成祝賀会には，当時名古屋商工会議所会頭であった青木鎌太郎が出席している。昭和13年には「名古屋近東アフリカ輸出組合」が結成された⁽⁵⁶⁾。昭和14（1939）年11月24日には，来名した回教徒視察団⁽⁵⁷⁾のための晩餐会が大日本回教協会⁽⁵⁸⁾と名古屋商工会議所の共同主催で名古屋商工会議所において，翌25日には松坂屋主催で午餐会が松坂屋で行われている⁽⁵⁹⁾。昭和15（1940）年4月4～11日には松坂屋において，愛知県・名古屋市・大日本回教協会・東京イスラーム教団⁽⁶⁰⁾主催で回教圏展覧会が開催された⁽⁶¹⁾。さらにその期間中の4月6日には，松坂屋六階社交室にて，回教圏貿易座談会も行われている⁽⁶²⁾。

以上のように，遅くとも昭和9（1934）年頃より，名古屋市の実業家たちは名古屋商工会議所や松坂屋を中心に，中東あるいはイスラーム世界との関係を持とうとしていたことがうかがえる。それでは，彼らと在名古屋タタール人と

の関係はどのようなものであったのか。

前述のように、昭和9（1934）年1月22日にイスハキと在名古屋タタール人の有力者たちが当時名古屋商工会議所副会頭であった高松定一を通じて60人の日本人商人と会見し、昭和12（1937）年1月22日の名古屋モスク完成祝賀会には、名古屋商工会議所会頭であった青木鎌太郎が出席しているものの、これら以外の在名古屋タタール人と実業家たちとの関係は見出すことができない。上述の昭和15（1940）年4月6日に松坂屋にて開催された回教圏貿易座談会においても、出席者のなかにタタール人の名は見当たらない。

（4）公的機関や在京イスラーム関連団体

日本の軍部は昭和6（1931）年の満洲事変以後、本格的なイスラーム政策に着手する⁽⁶³⁾。一方、外務省は昭和11（1936）年まで、イスラームや在日タタール人工作についての具体的な構想はもっていなかったとされる。いずれにせよ、外務省および軍部がタタール人など日ムスリムに関心を持ち、彼らの利用を考えるようになるのは、昭和11（1936）年11月の「日独防共協定」や「日独伊三国防共協定」締結に伴うソ連との関係の変化と、昭和12（1937）年7月7日の盧溝橋事件を発端とする日中の全面衝突（日中戦争）によっていた⁽⁶⁴⁾。

たとえば、東京モスクの起工式（昭和12（1937）年10月19日）や献堂式（昭和13（1938）年5月12日）には多数の陸海軍の将校が参加していた⁽⁶⁵⁾。昭和13（1938）年5月20日に創立された「日本在留イスラーム教団聯合会」（同年7月8日に「大日本イスラーム教団聯合会」へ名称を変更）もそれまで関係が薄かった地方のムスリム・コミュニティを管理下に置くためであり⁽⁶⁶⁾、在名古屋タタール人コミュニティもその範囲に含まれていた。

このように日本政府や軍部が対イスラーム政策を本格化させるなかで、在名古屋タタール人は日本人が大きく関与していた在京イスラーム

関連団体との関係を持ち始める。たとえば、昭和14（1939）年11月に東京の松坂屋において、大日本回教協会・東京イスラーム教団主催で開催された回教展覧会には、名古屋支部と、当時名古屋支部支部長であったデイレツシャー・シズカノーフ Devletshah Sezgan⁽⁶⁷⁾が出席している⁽⁶⁸⁾。さらに昭和16（1941）年6月12日には、大日本回教協会主催で新愛知新聞社講堂において、隈部種樹前イラク公使、中山詳一前イラン公使、横山正幸前エジプト公使の講演、大日本回教協会初代会長（昭和13（1938）年9月～昭和17年12月）であった林銑十郎による挨拶などがあった⁽⁶⁹⁾。この時、大日本回教協会理事であった花岡止郎が在名古屋タタール人と接見し、学校を見学して、コミュニティに50円を寄附している⁽⁷⁰⁾。これらのことから、在名古屋タタール人が在京イスラーム関連団体との関係を持ち始めたのは昭和14（1939）年前後であったことがうかがえる。

ところで、昭和12（1937）年7月7日の盧溝橋事件勃発以降、在名古屋タタール人による積極的な献納活動がみられる。たとえば、同年7月には名古屋に駐屯していた第三師団に61円50銭や慰問袋40個を、9月にも千人針4枚を作成して献納している。このため、9月18日には陸軍大臣より感謝状をもらっている。さらに10月には包帯206本を千種警察署へ献納している⁽⁷¹⁾。これらの献納活動を行った理由としては、「今次（北支）事變と共に我國銃後國民の熱烈なる愛國熱に感激し同志相寄り…」とある⁽⁷²⁾。そして、昭和12（1937）年以降も軍部への献納は継続したようである⁽⁷³⁾。このような献納活動は、名古屋市に駐屯していた第三師団の一部が上海に派遣された8月18日⁽⁷⁴⁾以前から行われていたことから、単に第三師団に向けたものではなく、日本軍全体に向けたものであったと推測される。なお、同様の献納は東京回教徒団やイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会神戸支部もほぼ同時期に行っている⁽⁷⁵⁾。上記のように、昭和12（1937）年の7～8月時点では、在

名古屋タタール人と東京回教徒団の関係が「途絶」していたことを踏まえると、このような名古屋、東京、神戸のタタール人がほぼ同時期に日本軍への献納を行った背景には日本政府や軍部の関与があった可能性もある。

(5) 小結

本章をまとめると、まず在名古屋タタール人と名古屋市の市井の人々との関係は、コミュニティの中心であった西・東両区において、近隣の人々との関係は陰悪や疎遠なものではなく、良好であったといえる。その要因としては、タタール人が日本社会へ馴染もうとする努力があったことが考えられる。一方、名古屋市の実業家は遅くとも昭和9（1934）年ころより中東地域やイスラームに関心を持ち始めたが、それが在名古屋タタール人との交流に結び付くことはなかったようである。その理由として、在名古屋タタール人就業者の殆どが零細商人であり、その商業範囲も近隣に限られていたことを踏まえると⁽⁷⁶⁾、中東方面への輸出販路の拡大を目標としていた実業家たちには、在名古屋タタール人との関係はあまりメリットがなかったため、接触も僅かであったと考えられる。

次に、在名古屋タタール人と在京イスラーム関連団体との関係がみられるようになるのは昭和14（1939）年以降である。一方で、日本政府や軍部にとって、少なくとも名古屋モスクの落成式が行われた昭和12（1937）年1月22日までは、在名古屋タタール人コミュニティは積極的に接触する必要がある存在ではなかった。実際、名古屋モスクの完成については当該年度の『外事警察概況』では一切記されていない。しかし、そのような政策の転機となったのは、先行研究が指摘するようにやはり昭和12（1937）年7月7日の盧溝橋事件の勃発であろう。その直後から少なくとも名古屋、東京、神戸のタタール人が一斉に日本軍への献納活動を行ったことから、その背後に日本政府や軍部の関与があり、在名古屋タタール人コミュニティと接

触していた可能性が考えられる。

おわりに

以上の考察から、戦前期における在名古屋タタール人の交流関係の一端を明らかにした。彼らは単に他都市のタタール人と関係があっただけではなく、多様な交流関係を結んでいた。ただし、それぞれとの関係性には濃淡があり、在名古屋タタール人は多様な交流関係を積極的に利用した大規模な商業の展開や政治活動は行わなかったようである。交流関係の中心は、当時日本最大のムスリム・コミュニティであった神戸のタタール人やコミュニティ近隣の人々であった。

一方で、在京イスラーム関連団体や日本政府や軍部との関係はうすく、遅れて形成された。東京を中心とする日本国内のムスリムの統制には限界があったことは指摘されており⁽⁷⁷⁾、在名古屋タタール人コミュニティにもその統制は充分には届いていなかったと思われる。そして、日本の公的機関、とくに東京の官僚や軍部との関係は、おそらく在神戸タタール人コミュニティ以上に希薄であった。その理由としては、神戸や東京のコミュニティと比べて、人数が少なく（最盛期でも60人前後）、突出した有力者や貿易商もいない在名古屋タタール人コミュニティは、日本政府や軍部、在京イスラーム関連団体にとっては利用価値が少なく、看過できる存在であったためであろう。

ただし、在京イスラーム関連団体との関係が始まる以前より、統制は殆ど受けなかったにせよ、在名古屋タタール人コミュニティは日本政府や軍部と接触していた可能性もある。具体的に、どのような経緯で在名古屋タタール人と日本政府や軍部が関係をもつようになったのかという問題を明らかにするためには、盧溝橋事件勃発後、名古屋・東京・神戸のタタール人が同じように日本軍への献納を行ったことへの日本政府や軍部の関与を考察する必要があるだろう。

最後に、タタール人と名古屋在住のほかの外国人⁽⁷⁸⁾との関係は見出すことができなかった。この問題については今後の課題としたい。

<注>

- (1) 本稿では、福田義昭氏の定義（福田義昭「神戸モスク建立前史—昭和戦前・戦中期における在神ムスリム・コミュニティの形成—」白杵陽（研究代表者）『日本・イスラーム関係のデータベース構築—戦前期回教研究から中東イスラーム地域研究への展開—』（平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書（課題番号20320095）），2008（以下、福田2008），32頁）に従い、タタール人を「旧ロシア領出身のムスリム」という意味で用いる。
- (2) たとえば、近年のものを挙げると、重親知左子「イスラームはタタール人亡命者とともにロシアから」津久井定雄・有宗昌子（編）『ロシア：祈りの大地』，大阪大学出版会，2008，245-264頁；坂本勉（編著）『日中戦争とイスラーム：満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』，慶應義塾大学出版会，2008；松長昭『在日タタール人：歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』，東洋書店，2009（以下、松長2009）；オスマノヴァ・ラリサ「戦前の東アジアにおけるテュルク・タタール移民の歴史の変遷に関する覚書」『北東アジア研究』10（2006），45-66頁；Usmanova, Larisa. *The Türk-Tatar Diaspora in Northeast Asia*, Tokyo: Rakudasha, 2007（以下、Usmanova2007）；Dündar, Ali Merthan. *Japonya'da Türk İzleri: bir kültür mirası olarak Mançurya ve Japonya Türk-Tatar Camileri*, Ankara: Vadi Yayınları, 2008；メルトハン・デュンダル「私は夢も日本語で見ていた：トルコ・タタール移民の活動」塩川伸明・小松久男・沼野充義（編著）『ユーラシア世界2：ディアスポラ論』，東京大学出版会，2012，205-228頁などがある。このほか、松浦正孝（編著）『アジア主義は何を語るのか：記憶・権力・価値』，ミネルヴァ書房，2013にも、関連論文が幾つか所収されている。

- (3) たとえば、福田2008，23-62頁；同「神戸モスク建立—昭和前期の在神ムスリムによる日本初のモスク建立事業—」『アジア文化研究所研究年報』45（2011），32（113）-51（94）頁（以下、福田2011）；同「戦中期における国内ムスリム団体の統制と「回教公認問題」—在神戸ムスリム・コミュニティの視点から—」『アジア文化研究所研究年報』47（2013），156（77）-175（58）頁（以下、福田2013）；渡辺賢一郎「戦前期の神戸におけるタタール人の集住と活動—移民・コミュニティ・ネットワーク—」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』5（2006），206（47）-183（70）頁などがある。
- (4) 吉田達矢「戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相：人口推移と就業状況を中心に」『名古屋学院大学論集：言語・文化篇』24-2（2013），281-291頁（以下、吉田2013a）；同「戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相（2）：名古屋回教徒団とイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会名古屋支部の活動を中心に」『名古屋学院大学論集：人文・自然科学篇』50-1（2013），15-34頁（以下、吉田2013b）。
- (5) 重親知左子「松坂屋回教圏展覧会の周辺」『大阪大学言語文化学』12（2003），179-191頁（以下、重親2003）。
- (6) 吉田2013a，283頁。ただし、名古屋市に定着するまでの彼らの履歴については、その多くがいまだ不明である。
- (7) クルバンガリーについて詳しくは、西山克典「クルバンガリー追悼—国際情勢に待機して—（1）」『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）4-2（2006），31-46頁；同「クルバンガリー追悼—国際情勢に待機して—（2）」『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）5-1（2006），93-109頁；松長昭「東京回教団長クルバンガリーの追放とイスラーム政策の展開」坂本勉（編著）『日中戦争とイスラーム：満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』，慶應義塾大学出版会，2008，179-232頁などを参照。

- (8) アヤズ・イスハキーについてはとりあえず、松長昭「アヤズ・イスハキーと極東のタタール人コミュニティ」池井優・坂本勉（編）『近代日本とトルコ世界』、勁草書房、1999、219-263頁を参照。
- (9) 『名古屋新聞』16486号（昭和12（1937）年1月23日）。
- (10) 吉田2013b、18頁。
- (11) 吉田2013b、31頁。
- (12) 内務省警保局（編）・石堂清倫（解題）『極秘 外事警察概況』、2巻、龍溪書舎、1980、189頁；*The Nagoya Muslim Mosque*、名古屋トルコ・タタールイスラム教會、1937（以下、『冊子』）、4頁。アグルジは1922年に来日し、昭和6（1931）年2月まで2期にわたって神戸トルコ・タタール協会の会長を務めた（福田2008、35頁）。
- (13) 『外事警察概況』2、188頁。
- (14) ウファUfa生まれで、生没年は1897～1977年とされる（Morimoto, Abu Bakr (Iskandar Chowdhury, tr.), *Islam in Japan: its past, present and future*, Tokyo: Islamic Center Japan, p.28）。これ以外の彼の経歴は不明な点が多いが、彼が訳に携わったシャムグニの著作では、「…（極東イデルウラルトルコタタール文化教會宗教部部长ミヂャル・シャムグニ）氏の友にして歐洲大戰（＝第一次世界大戰）に従軍し然して又イデルユラルトルコ地方のソ聯に侵略さるるや止むなく日本に亡命せる名古屋トルコタタール・イスラム文化教會建設委員長ハミドリ氏…」（ミヂャル・シャムグニ（城南臥牛、譯）『アルラーの神と豫言者達』、名古屋、1939（以下、『アルラーの神と豫言者達』）、1頁）とある。
彼がいつ来日し、名古屋市に定着したのかは不明であるが、昭和7（1932）年2月8日の名古屋回教徒団の会合の参加者のなかに「テミルバイ・ハミドリフ」という者がいる（吉田2013a、285頁）。この人物は彼のことと思われるので、遅くとも昭和7（1932）年2月8日には名古屋市に定着していたようである。その後は、Usmanova2007や『外事警察概況』各巻の記録によれば、昭和12（1937）年前半、昭和15（1940）年3月以降19（1944）年5月まで名古屋支部支部長、これ以外の期間においても名古屋モスク建設委員会委員長や副支部長などコミュニティの要職を務めた。
- (15) 『冊子』、13-16頁。
- (16) 『アルラーの神と豫言者達』。
- (17) 『名古屋新聞』16486号。
- (18) 『新愛知』16319（昭和12（1937）年1月23日）。ただし、この100人余りが本当に全員タタール人であったかは不明である。たとえば、Usmanova2007、p.105では、エジプト、トルコ、アフガニスタン、イラン、アラブやインドのムスリムも参集したと記されている。また、『新愛知』16319では、支那方面からの参加者もみられたと記されているが、彼らがタタール人であったかも不明である。
- (19) 『冊子』、12頁。また、上述の『名古屋新聞』16486号にも、「満洲、インドのマホメット教徒から寄附を募り…」と記されている。
- (20) 『名古屋市統計書』では、昭和8（1933）年に男1人、昭和11（1936）年に男3人が確認できるのみである。
- (21) 『外事警察概況』2、187頁。
- (22) 『冊子』、4頁。このほか、<http://www.wimnet.org/articles/masjap.htm>において掲載されている写真（Maulana Abdul Aleem Siddiqui (RA) with the local Imam examine the direction of qibla (direction of Kaaba in Mecca)）は、『新愛知』16189号（昭和11（1936）年9月13日）にも掲載されている。
- (23) 警視總監安倍源基発、内務大臣・外務大臣ほか宛、昭和13（1938）年5月16日付、「東京回教団寺院落成式典開催状況ノ件（回教関係第二報）」（JACAR（アジア歴史資料センター）、Ref. B04012575600、本邦寺院関係雑件／第一巻7、回教寺院（I-2-2-0-016）、外務省外交史料館、6画像目。
- (24) 福田2013、162（71）-163（70）頁。
- (25) *The Kobe Muslim Mosque: A Souvenir Booklet*

- Issued in Commemoration of the Opening Ceremony of the Kobe Muslim Mosque*, Kobe, 1935, pp.27-30.
- (26) 有賀についてはとりあえず、小村不二男『日本イスラーム史：戦前、戦中歴史の流れの中に活躍した日本人ムスリム達の群像』、日本イスラーム友好連盟、1988（以下、小村1988）、151-166頁；四戸潤弥「アフマド有賀文八郎（阿馬土）—日本におけるイスラーム法学の先駆者としての位置づけ—」『宗教研究』78-2（2004）、301（517）-323（539）頁などを参照。
- (27) 『冊子』、19-20頁。
- (28) Usmanova2007, p.105.
- (29) 小村1988, 299頁。
- (30) 小村1988, 165頁。
- (31) 『外事警察概況』2, 188頁；『外事警察概況』3, 152頁。
- (32) 小村1988, 303頁。
- (33) 『アルラーの神と豫言者達』。
- (34) 鈴木剛は、明治37年（1904）4月に神奈川県柿生村で生まれ、昭和20（1945）年4月1日に搭乗していた阿波丸がアメリカ潜水艦によって撃沈されて死去した。鈴木は1934-37年のあいだに三回メッカ巡礼を行っている。鈴木の実業に關しては、田澤拓也『ムスリム・ニッポン』、小学館、1998に断片的に記されている。
- (35) 年代はずれるが、昭和15（1940）年時点での回教圏研究所研究員の一人に、鈴木朝英（1909-2000）という人物がおり（臼杵陽「戦前日本の「回教徒問題」研究—回教圏研究所を中心として—」岸本美緒（編）『岩波講座「帝国」日本の学知』、第3巻、岩波書店、2006、242、251頁）、彼の可能性もある。
- (36) 吉田2013a, 285-286頁。
- (37) 『新愛知』16189号。
- (38) 小村1988, 300-302頁。
- (39) 『ミッリー・バイラク』は、満洲の奉天においてアラビア文字表記のタタール語で刊行された週刊新聞。昭和10（1935）年11月1日に創刊され、昭和20（1945）年3月まで約440号が発刊された。
- 各号の主要記事一覧は、Usmanova2007を参照。
- (40) 鴨澤巖「在日タタール人についての記録（一）」『法政大学文学部紀要』28（1982）、47頁。
- (41) 小村1988, 301頁。また、「…又日本人の篤志家に援助を請ひて茲に目的を貫徹して名古屋イスラム教院 [=名古屋モスク] を建設することが出来たのであります」という記述もある（『冊子』、5頁）。
- (42) それぞれ、『新愛知』16319；『名古屋新聞』14686；『大阪朝日新聞』19846（3紙とも昭和12（1937）年1月23日付）。
- (43) 青木謙太郎は、昭和11（1936）年12月-15（1940）年11月、18（1943）年9月-21（1946）年1月まで名古屋商工会議所会頭であった（名古屋商工会議所（編）『名古屋商工会議所九十年史』、名古屋商工会議所、1971（以下、『名古屋商工会議所九十年史』）、1099頁）。
- (44) 渡邊龍聖については、堀田慎一郎『名古屋高等商業学校—新制名古屋大学の包括学校②—』（名大史ブックレット10）、名古屋大学文書資料室、2005、23-30頁；同『名古屋大学歴代総長略伝—名大をひきいた人びと—』（名大史ブックレット13）、名古屋大学文書資料室、2009、15-17頁などを参照。なお、渡邊は昭和10（1935）年には、大正10（1921）年より務めてきた名古屋高等商業学校校長職を退職している。
- (45) 『明治大正昭和名古屋人名録』、日本図書センター、1989（底本：浅野松次良『第四十版 日本紳士録』、1936、交詢社）（以下、『明治大正昭和名古屋人名録』）、43頁。
- (46) 『大阪朝日新聞』19846。
- (47) 『明治大正昭和名古屋人名録』、81頁。
- (48) 吉田2013a, 287-288頁。このほか、「…トルコ人のボスはハミドリと申す人でして、日本へ亡命して来るとき持って来た毛布などを売って生計を立てていた」という証言もある（小村1998, 301頁）。
- (49) 福田2011, 40（105）頁。
- (50) 当時のアフリカと名古屋との関係については、青木澄夫「昭和前半期における名古屋経済人の

- アフリカへの関心—名古屋商工会議所の活動を中心に一」『アリーナ』4（2007）、152-180頁を参照。
- 51) 新修名古屋市史編集委員会（編）『新修名古屋市史』、第6巻、名古屋市、2000（以下、『新修名古屋市史』6）、576頁。
- 52) 高松定一は、昭和11（1936）年12月から15（1940）年11月まで名古屋商工会議所副会頭、昭和15年11月から18（1943）年8月まで名古屋商工会議所会頭を務めた（『名古屋商工会議所九十年史』、1097頁）。
- 53) Usmanova2007, p.103.
- 54) 中川貞三（編）『近東埃及市場調査』、名古屋新販路輸出協会、1937。
- 55) 名古屋商工会議所（編）『名古屋商工会議所五十年史』、名古屋商工会議所、1941、679頁。
- 56) 『新修名古屋市史』6、670頁。
- 57) 大日本回教協会の招聘に応じて来日した世界各地のムスリムたちにより昭和14（1939）年11月15日に組織され、同月16-30日にかけて東京、箱根、名古屋、京都、大阪、神戸を視察した（『記録 回教圏展覧會：全世界回教徒第一次大會來朝回教徒視察團』、大日本回教協會、1940（以下、『回教圏展覧會』）、23-25、89-105頁）。
- 58) 昭和13（1938）年9月19日に設立された。創立主旨は「世界に於ける回教の教團教徒と親善融和を圖り相互の福祉を増進するにあり…（後略）」とされている（『外事警察概況』4、92-93頁）。また大日本回教協會は軍部の支援を得て設立され、当時のイスラーム研究の統合を意図した機関として、最大の陣容や規模を誇っていたとされる（店田廣文「第2章 戦中期日本のイスラーム研究その1—『大日本回教協會寄託資料』の分析—」店田廣文（研究代表者）『戦中期日本におけるイスラーム研究の成果と評価—早稲田大学「イスラーム文庫」の分析—」（平成15年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書（課題番号15530347））、2005、13頁）。
- 59) 『回教圏展覧會』、24、99頁。
- 60) 昭和13（1938）年6月24日にアブデュルレシト・イブラヒムを団長として設立された（『外事警察概況』4、93頁）。当時2つに分裂していた在京ムスリムを統合することを目的としており、顧問として多数のアジア主義者や軍人が入っていた（福田2013、162（71）頁）。
- 61) 重親2003、180頁。
- 62) 「回教圏貿易座談會」『回教世界』2-6（1940）、37-61頁。
- 63) 坂本勉「序：戦時日本の対イスラーム政策」坂本勉（編著）『日中戦争とイスラーム：満蒙・アジア地域における統治・懷柔政策』、慶應義塾大学出版会、2008、IV頁。
- 64) 松長2009、34頁。
- 65) 松長2009、44-48頁。
- 66) 福田2013、162（71）-163（70）頁。
- 67) 1925年4月に妻子とともにハルビンより来日し（鴨澤1982、52頁）、同年4月25日に来名し、名古屋市中区東郷通三丁目十九番地豊職伊藤重次郎方に居住した。昭和6（1931）年時点では洋服行商であった（鴨澤巖「在日タタール人についての記録（二）」『法政大学文学部紀要』29（1983）、248頁）。また、Usmanova2007や『外事警察概況』各巻の記録によれば、彼は昭和9-10（1934-1935）年と昭和12（1937）年10月-15（1940）年ごろまで名古屋支部支部長を務めたようである。
- 68) 「（名古屋）イデル・ウラル・トルコタタール文化協會」名義で「トルコタタールの写真、婦人服、手袋、髪飾、頭包布、卓子掛など56点」、セズガンは「名古屋回教協會旗、写真、各種手工芸品、児童作品、婦人衣装など60点」を出品している（『回教圏展覧會』、6、10頁）。
- 69) 『外事警察概況』7、387頁。
- 70) Usmanova2007, p.107.
- 71) 『外事警察概況』3、153-154頁。
- 72) 『外事警察概況』3、153頁。
- 73) 小村は『日本イスラーム史』のなかで、「…彼ら（在名古屋タタール人）は、この戦時中は日本陸軍病院に入院治療中の白衣の傷病兵を慰問

して見舞品を贈呈したり、航空機増産のため何回となく国防献金をしたり、日本人以上銃後の対日協力をしたムスリムたちであったが…」と記している（小村1988, 165頁）。

(74) 8月15日に第三師団に応急動員が命令され、同月18日には師団先遣隊が名古屋港より海軍艦艇に乗船し、上海に派遣された（『新修名古屋市史』6, 623頁）。

(75) 『外事警察概況』3, 150, 152頁。

(76) 吉田2013a, 287-288頁。

(77) 福田2013, 171 (62) 頁。

(78) 東区布池町三丁目には大正8（1919）年5月1日に「アメリカ領事館」が設置され、同じく東区主税町三丁目には昭和7（1932）年10月17日に「中華民國神戸總領事館名古屋辨事處」が設置された（『大正昭和名古屋市史』, 4巻（商業篇（下））, 名古屋市, 1954, 266-268頁）。

（客員研究員・名古屋学院大学経済学部講師）